

# 庭風流・破子風流・調度風流

泉万里

Furyu Garden, Furyu Warigo and Furyu Furniture

はじめに

- ① 庭風流
- ② 座右の破子風流
- ③ 幻想の調度風流

## 【論文要旨】

この小文は、「その場限りのもの」という、風流の作り物本来の姿から逸脱した作り物を拾い上げて紹介することを試みたものである。

はじめに挙げたのは、反復使用されていたらしい、屋外に設置される風流の作り物である。具体的には、儀式終了後に解体されるものの、山に取り付けられていた作り物の優れたものは保管されて再使用されていた古代の標の山や、中世の石清水八幡社において、唐櫃に入れて保管されていた放生会会場に並べる人形や馬形などである。続いて、記念品として形を変えて保管され、鑑賞されていた例として、風流の破子を貼りつけるための衝立が作られていることを『看聞日記』に確認した。

そうして最後に、幻想のなかで詠えられた、源氏物語をテーマとした風流の調度のセットが近世後期にみられることに注目した。それは厳密には風流の作り物ではない。アルバム（画帖）に貼りこまれた紙や板、錦、金具などで作られたミニアチュアや、

絵巻にその姿を羅列的に描かれている虚構の調度一式である。そのアルバムや絵巻を所有することが、虚構の源氏物語風流の調度一式を所有することであったのだろう。特定の時空間との結びつきを絶って、はじめからアルバムや絵巻のなかにおさまるそれらは、風流の作り物の化石のようなものとみなすべきなのかもしれない。

## はじめに

行事や祭礼に際して、その場や、そこに参集する人々、そこで用いられる道具類を飾るために、さまざまな作り物が作られてきた。その場にふさわしい趣向をこらし、人目を驚かせるものも少なくなかった、そのような作り物を「風流」といったり、「風流の作り物」といったりする。

すでに、日高薫氏や佐野みどり氏、そして辻惟雄氏によって、平安時代の宮中や貴族邸で行われた歌合せの場に並べられた華麗で贅沢な州浜の作り物から室町時代の夏のもてなしのひとつであった、風呂の周囲に並べられたさまざまな作り物にいたるまで、その様相はかなり詳しく紹介され、語られてきた<sup>1)</sup>。そして、そこで指摘されてきたことのひとつに、風流作り物はその場限りのものであったということがある。しかし、文献を追っていくと、風流の作り物すべてがその場限りの、短命なものであったわけではないこともわかってくる。大切に保存され、時を超えて繰り返し愛でられる、あるいは、座右に長く留め置かれて愛玩される、そのような受容に込められていた作り物もあった。この小文では、そういった、長い時を超えて愛されていた風流の作り物に注目してみたい。

## ①庭風流

保存される作り物の代表例は、古代の大嘗会の儀式の庭に立てられた標の山であろう。大嘗会の儀式終了後に、山は、後宮の女性たちとくつろぐ天皇の居所に運ばれて、そこであれこれと眺め楽しめるひとときが持たれたこともあったらしい<sup>2)</sup>。そして、その後、解体されるものの、取り付けられていた作り物のうち優れたものは保管されて、再使用の機会が訪れるまで長く眠らされていた<sup>3)</sup>。平安時代後期には、その保管

場所として、七条朱雀の、かつて外交使節の宿所であった鴻臚館があてられていたこともわかっている<sup>4)</sup>。

中世では、石清水八幡社の什物一覧のなかに、放生会に使われたとみられる風流の作り物セット一式が含まれていることに注目したい。「庭風流唐櫃（一人形馬形等納之、同神事之時所入也）」という記述があり、そこから、馬形や人形などが唐櫃に保管されて、反復使用されていたことが窺える。「庭風流」という言い方から、放生会の場に並べ飾られていたものと推測される。『駒競行幸絵巻』の行幸の庭には鶴亀の作り物が五、六基置かれているが、これなども同じく「庭風流」のたぐいであろう。また、『とわずがたり』や『増鏡』（第一一老のなみ）に、相手方の「槇の島の気色」の庭に据え付けられていた「宇治川の橋」を、夜陰に乗じて盗み出し、自分の壺庭に設置したという前栽合わせのエピソードが採録されている。この「宇治川の橋」も「庭風流」と呼ばれていたものではなからうか。

いずれにせよ、戸外に飾る「庭風流」の場合、ある程度の強度があったと推察され、それゆえ反復使用されることになったと考えられる。それは、祭礼のたびごとに、保管所からとりだされて組み立てられ、祭礼終了後に再び保管所に戻される、現在の祇園祭の山や鉾のあり方とよく似ている。

しかし、「庭風流」よりも、はるかにもろく、それこそ一回限りの使用を前提とした、はかない作り物も保存されることがある。再使用を期して、というのではない。記念として、あるいは捨てるに忍びなく、座右の愛玩物としたいという欲求からなされているようである。

## ②座右の破子風流

晴の行事のために特別に用意される破子が、素晴らしい出来映えであった場合に、『破子の屏風』『破子の衝立』といった言葉が見られるよ

うに、屏風や衝立に貼りつけ、保存、鑑賞するといったことも行われていたようである」と、『看聞日記』を引いて明快に指摘したのは片桐弥生氏である。破子とは、身も蓋もない言い方をすれば、片木などで作られた、弁当箱のような、料理を盛り合わせるための器なのだが、行事にあわせて趣向を凝らし、絵が描かれたり、作り物が取り付けられたりしたものを「風流破子」とか「破子風流」などと称する。残念ながらそれと確認できる絵画史料を管見の範囲では見いだせていない。

片桐氏の指摘に沿いながら『看聞日記』の記述を再度追いかけてみよう。まず、注目されるのが、使用済みの破子を入手して、それを衝立に打ち付けている事例である。永享七年（一四三五）四月一六日から一八日にかけて記録されている、宮中の「舞御覧」の宴には、たいへん見事な風流の破子が用意されていたらしい。宴が果て、その余韻醒めやらぬ四月二二日に、そのときの破子一合が後崇光院のもとに届けられている。「絵舞沈箸等殊勝々々」と記されており、舞の絵が器面に描かれ、香木製の箸が付属していた破子であったとみられる。

その二日後、四月二三日には、今度は「嶋一合。舞絵破子一合又被下」とある。嶋とは州浜形の、足つきの台で、上に食物や酒を満たした器や盃を、作り物の人形や花などとともに飾り乗せるものを指す。遊楽図屏風のなかにはしばしば見かけるものであり、春日大社宝物館には、新しいものではあるが、その実物が保管されている。嶋と破子は本来別々の物の名称であったと思われるが、『看聞日記』では、しばしば「嶋破子」とか、「破子嶋」と表記されるほか、「破子一嶋」などと書かれることもある。破子と嶋とがセットになっていたのか、あるいは食物を盛る、凝った造作の器物を「嶋破子」「破子嶋」と総称していたのかとも思われるのだが、遺憾ながら、その器物の形状を同定しがたい。割り注の「舞絵参向」とあることも、意味をつかみかねるところだが、ともかくこうして、四月の舞御覧の宴を飾っていた美しい器が複数、後崇光院の手に

に集められた。

そうして、やや時間を置いて、六月一二日に、番匠を呼んで「突立障子骨」を作らせている。六月二〇日には、あらたに、その衝立に打ち付けるために、と言って、やはり舞御覧の宴に使われた「破子嶋之蓋一賀茂祭」をねだって入手している。いうまでもなく賀茂祭は、四月の行事である。また、この記述から、絵は蓋に描かれていたこともわかる。先に下された破子も、蓋に舞の絵が描かれていたのであろう。

二二日にはふたたび番匠が呼ばれ、衝立の骨作りが続けられ、二六、二七日には唐紙師、塗師が来て、骨の塗装、貼り付ける紙を用意するといった作業が進む。そして、七月四日には衝立の紙が貼り立てられ、六日に、番匠と銅細工師がやってきて骨にはめる金具を仕立て、最終的に「嶋二舞。賀障子両方に打之」って仕上げている。両方という記載からおそらく衝立二枚で一双として組み合わせたものであったと推測する。「甚だ其の興あり」と、後崇光院は出来映えに満足気である。風流の破子の蓋に描かれていた「舞絵」と「賀茂祭絵」を保存し、鑑賞するのが、この衝立制作の目的であったと考えられる。これが、片桐氏の指摘する「破子の衝立」である。ただし、「破子の衝立」という言い方は『看聞日記』にはない。

いっぽう、片桐氏が指摘する「破子の屏風」のほうは、同記永享一〇年（一四三八）二月二七日と三月四日条に記録されている。片隻ずつばらばらに内裏から下賜されているのだが、「作物破子之屏風」、「破子之小屏風」などと表記されており、一五歳の少年が認めた色紙が屏風に貼ってあることも付記されている。しかし、これらが、最前の衝立同様に、器を打ち付けた屏風であるかどうかはいささか疑問が残る。「作物破子」を打ち付けた屏風と解釈できるいっぽうで、風流の破子に飾り付けられていた小さな作り物の屏風であった可能性もあろう。料理や酒を盛る器に、詩歌の情景をかたどって、家屋や調度の、小さな雑道具めいた作り

物を飾ることはしばしば行われており、その種のミニチュア屏風であったかもしれない。いずれにしても、衝立に破子の蓋を貼り付けた事例にくらべて、情報が少なく、その実体を窺うことができないのが残念である。

### ③ 幻想の調度風流

以上のように、保存され反復使用されていた「庭風流」と呼ばれる作り物があったこと、そして、破子など、そのままでは保存に耐えられないような作り物の場合には、衝立に仕立て直すなどの工夫をして、眺められるものとしての命をながらえさせていたことがわかる。「看聞日記」の衝立は、「四月に行われた舞御覧の華麗な饗宴」の追憶のよすがとされていたにちがいない。この、色鮮やかな絵つきの破子の蓋が貼り付けられた衝立の具体像というものを、『看聞日記』の文面よりほかには窺うすべもないことを残念に思っていたが、最近、片木や厚紙、錦、小さな金物、組紐などで作られた、小さな作り物八点をセットにして貼り付けた屏風や画帖をみる機会に恵まれた。そのなかには、片木で作られた硯箱の蓋に彩り豊かに「源氏物語図」が描かれているものもあり、『看聞日記』の衝立や、そこに貼り付けられた破子の蓋を復元的に想像する手がかりにもなるうかと感じられたので、最後にそれを紹介してきた。

それは、「源氏八景」を描いた屏風や硯箱など、八点の調度を作り物にして屏風や画帖に貼りこんだものである。ただし、屏風（個人蔵）<sup>9</sup>のほうは最近改装されたものとみられる。当初の形状を保っていると思われるのは、井伊家伝来品として彦根城博物館に所蔵される画帖形式の「源氏八景」である。しかし、作り物自体は、ちいさな金具に至るまで、両者は同一であり、同工房か、同人の作とみなせる。

いうまでもなく、八景見立てで源氏物語から八場面を抜粋する趣向は、この作り物制作者の創案ではない。テキストとしての「源氏八景」は、江戸時代初期に成立したと考えられ、宮川葉子氏によれば、それは、「帚木夜雨」「須磨秋月」「明石晚鐘」「松風帰帆」「朝顔暮雪」「乙女初雁」「玉鬘晴嵐」「夕霧夕照」と題して各帖から、一五〇から三〇〇字程度の本文を抜き書きしたり、あるいは、代表的な和歌一首を抜き書きするものである。前者の形式の「源氏八景」は、宮内庁書陵部や京都大学図書館、仙台市博物館などに所蔵される一二点が確認されているが、そのなかで仙台市博物館所蔵の「源氏八景御手かかみ」は絵を伴った画帖になっている。<sup>10</sup>

絵は、仙台藩第五代藩主の伊達吉村（一六八〇～一七五二）によるもので、制作時期は一八世紀前半となるが、いかにも江戸狩野風の瀟洒で淡白な画風の「源氏八景図」である。探幽以降の狩野派が、古典や古歌に取材した復古的な主題をレパートリーにさかんに取り入れていたことから推測して、「源氏八景」もテキストが成立したとされる江戸時代初期からほとんど時を措かず、狩野派によって絵画化され、その図様が粉本などを通して広まったと考えられる。「源氏八景御手かかみ」には、人の姿を描かずに、寺の鐘樓を遠景に、手前に燭台が灯された座敷をのぞかせる屋台と秋草の茂る庭を描く「明石晚鐘」図【図1】など、従来の源氏絵とはひと味ちがう、留守模様風の図様もあるが、それは吉村の独創ではなく、彼が学んだ狩野派粉本においてすでに完成されていたのであろう。

さて、作り物の「源氏八景」に目を転じよう。彦根城博物館所蔵の「源氏八景」画帖には、仙台市博物館所蔵の画帖とはちがいが、詞はなく、八点の調度の作り物だけで構成される。<sup>11</sup>先にも触れたように、それは単純な「源氏八景図」ではなく、八点の調度を形作り、「源氏八景」はその調度の意匠として用いられるという、凝った表現をとる。調度と一言で呼んだが、その内容は、杉戸に濡れ縁、そして竹垣や御簾なども備えた

屋台から、画卷、掛軸、画帖、硯箱という文房具にまで及ぶ多岐にわたる品揃えである。

調度に描き込まれた八場面の「源氏絵」図様は、仙台市博物館所蔵本の図様とは違い、狩野派の図様が必ずしも支配的であったわけではなかったことが窺える。画帖自体には標題は記されていないが、ともに伝来している縮図があり、そこに標題が記されている。何の目的で作られたのかわからない縮図だが、画帖に貼り込まれている順に「壺番 帚木の夜雨」、「二番 須磨の秋月」と記し、貼り込まれている作り物の簡略な形や図様を墨で写し取ったスケッチを並べたものである。【図2】縮図の標題は順に「帚木の夜雨」「須磨の秋月」「明石の晩鐘」「松風の帰帆」「行幸暮雪」「幼の初鷹」「玉鬘の晴嵐」「夕霧の夕照」とされているが、「行幸暮雪」「幼の初鷹」は、それぞれ、「朝顔暮雪」と「乙女初雁」に当たるとして作られたものであったとすれば、画帖に詞が無いこととあわせて、本画帖を巡る人々の間に「源氏八景」本文への理解は希薄であったようである。

それぞれの作り物を見ていこう。「帚木夜雨」【図3】は、厚紙で作られた御簾のおろされた屋台である。御簾ごしに室内の三人の男と、その後方に立てられた屏風が見える。情景は、一目瞭然であるが、長雨続く静かな夕べに、源氏の手元にあった手紙を眺めているところである。このあと「雨夜のしなさだめ」が始まる。物語の状況設定が「雨夜」なのだ、この作り物では、さらに一段階表現に奥行きを設けており、男たちの背後の屏風が、まぎれもない「瀟湘夜雨図」屏風となっている。御簾ごしに見えるほの暗い部屋の、さらに奥に立てられた屏風絵に「源氏八景」の本歌が描かれているという趣向は、鑑賞者を悦ばせたであろう。

【図4】

「須磨秋月」は、定型的な源氏絵の「須磨図」屏風の作り物である。【図

5】右端、第一扇が折り返され、屏風裏の千鳥櫛模様の唐紙がみえている。屏風の縁木部分は細い片木が貼られている。その、厚さ一ミリあるかないかの縁木に、金具が小さな釘できちんと打ち留められているようにみえることには驚かされる。【図6】

「明石晩鐘」は、腰板をはめ、くの字形に組まれた二枚の明障子である。【図7】縁と腰板部分は片木、ほかは紙である。片木の木目がそのまま生かされている。近くの三昧堂の鐘の音が届く、情趣深く整えられた明石の君の住まいに源氏が訪れているところである。

「松風帰帆」は、画帖である。【図8】表紙に桐紋の織物を貼り、その四隅に金具をはめてある。画帖のなかの画帖ということになる。開かれた右の頁に揮毫されていない色紙を、左に別れを惜しむ明石の入道一家を描く。隅金具には菊の透かし彫りが施されている。【図9】

「朝顔暮雪」の作り物は硯箱である。【図10】柾目の通った片木を張り付けてこしらえられている。蓋がずらされて、中に納められた筆、硯、水滴が見える。このうち、水滴は金属板を打ち出して作られた作り物だが、ほかは描かれたものである。そして蓋の面に、「朝顔図」が描かれている。作り物としての見所は、柾目とその素材感を強調していることと、ふつくと丸みをおびた金属製の水滴であろう。

「乙女初雁」は、杉戸二枚が引違いにはめ込まれた屋台の一部である。【図11】杉戸は、これも柾目のあざやかな片木で作られ、縦がわずか五ミリほどの、小さな引き手は金属製である。そのほかの部分は厚紙である。杉戸絵として描かれる図様は、寄懸りに身体をあずけた男と後ろ姿の女が、閉ざされた蒨越しに、空を行く雁の気配に耳を澄ませ、庭には秋草が茂っているというものである。宮川氏の翻刻する善光寺所蔵の「源氏八景」の「乙女初雁」の本文は、若い夕霧と雲居雁の二人が、会うことが叶わず、雁の声に雲居雁が物寂しさをひとりつらせるといふくだりであり、男女が同室している図様は本文とは合致しない。【図12】

「玉鬘晴風」は、ほどかれようとする画卷である。【図13】表紙は錦貼りで、組紐が絵巻の紐として八双に結びつけられている。その画卷の絵として描き込まれている図様は、玉鬘の長谷参詣のくだりを表し、高台にある堂を描いている。

「夕霧夕照」は掛幅である。【図14】これもさきほどの画卷同様、表具部分は織物が貼られ、丁寧な風袋の露も紫の糸で作られている。図様は落葉宮を訪れる夕霧を描く定型的な源氏絵である。

以上が作り物「源氏八景」の概要である。その制作時期は、宮川氏が指摘するように、「雲上でも武家でも『源氏八景』が持て囃されていた」らしい享保年間（一七一六～一七三五）<sup>15</sup>以後であることには間違いない。さらに、金属や組紐などをコーラージュする手法は、笠翁細工や芝山細工といわれる一八世紀半ばから後半に評判をとった工芸技法と一脈を通じさせている点も考慮すれば、その制作時期をおおよそ、一八世紀末とみなすことができよう。

江戸時代には、徳川家伝来の「初音の調度」に代表されるような豪華絢爛な揃いの調度がある。『源氏物語』の「初音」にちなんだ意匠と、漆工芸の技術の粋をあつめて作り上げられた、贅沢な調度一式である。比較するまでもなく、おなじ『源氏物語』にちなむ揃いの調度といっても、この「源氏八景」作り物調度一式は、まことにささやかな、はかなくとも、この「源氏八景」作り物「源氏八景」が、複数現存しているということは、このささやかな調度一式も、それなりに好評であったことを裏付けていよう。

そして、興味深いのは、おなじように、源氏絵で揃えた調度一式という趣向を、江戸時代中期の作例と考えられる石山寺所蔵の「光源氏湖水五十四帖」と呼ばれる絵巻にもみることができていることである。<sup>16</sup> 絵巻を巻きほどくにつれ、湖の波を背景に、屏風、衣桁、琴箱、掛幅、扇面などが次から次へと描かれ、その屏風や掛幅、扇、衣桁の腰板、琴箱の側

面に源氏絵が描かれるという趣向である。【図15】作り物「源氏八景」がそうであるように、その図様はあくまでも具象的な絵であり、大名家の婚礼道具として作られていた揃いの調度の源氏の意匠が抽象度を高めた洗練された工芸意匠となっていることは対照的である。現実はこのような多彩な色彩や金銀砂子を使って源氏絵を描いた調度一式というものがあり得たとは思えず、あくまでも幻想の「源氏の調度」一式であろう。そうして、幻想の調度一式として作り物「源氏八景」を捉えようと、そこに、かつての風流作り物にきわめて近い性格が見えてくるように思われる。ここで想起したいのは、中世の風流作り物のなかに、同じように幻想の調度一式が揃えられることがあったことである。たとえば『明月記』にみられる、金で作った硯や筆などの文房具一式を銀の台に据えた風流や、舶来の錦などで作った唐机や棚、厨子などである。<sup>17</sup> いずれも、行幸の場や扇合せなどの場を華やがせるために用意された風流の調度であり、現実にはありえない幻想の調度であった。

中世の人々の夢見た幻想の調度は、金銀や唐物を素材とする豪華なものであったのに対し、江戸時代の人々の夢見た幻想の調度は、厚紙や片木で作られ、わかりやすい源氏絵を付けた、ささやかな一式であったということになる。しかも、そのような風流調度が設営される場合も失われた近世にあつて、幻想の調度はサイズを縮減し、画帖のなかにようやくその落ち着き先を見いだしている。作り物「源氏八景」を、風流の歴史のなかに位置づけるとすれば、それは、まさしく、最後の調度風流であったといえよう。

註

(1) 日高薫「室かざりの諸相——風流作り物から座敷かざりへ」『美術史論叢』六一九〇年、佐野みどり「第一篇 風流と造形」『風流 造形 物語——日本美術の構造と様態』スカイドア 一九九七年、辻惟雄「かざりと風呂と茶——林間の茶の湯」『かざり』の日本文化』角川書店 一九九八年。

- (2) 「竹むきが記 上」岩波新古典文学大系五一 中世日記紀行集 岩波書店 一九九〇年 二九三頁。
- (3) 『菅家文章』所収の「左相撲司標所記」には、大嘗会ではなく相撲の節会の際の標について、優れた出来映えの作り物のいくつかは再利用のものであったことが記されている。川口久雄校注『岩波古典文学大系七二 菅家文章 菅家後集』岩波書店 一九六六年 五三六～五三八頁。
- (4) 角田文衛『平安京の鴻臚館』古代文化 四二編八号 一九九〇年 三四頁。
- (5) 『石清水八幡宮史』史料第一集 石清水八幡社社務所刊 一九九六年(二刷) 二四九頁。
- (6) 片桐弥生「室町時代における古歌の造形」『日本文化研究』五号 一九九三年 四三頁。
- (7) 春日大社では「おん祭威儀物」と呼ぶ。三本の足つきの長方形の台に、紅白梅と松を立て、周囲に人形などの作り物をいくつか飾り置き、中央に盃を据えたものである。台の形が州浜形ではないから、正確には「盃台」というべきものだが、作り物としての性格は同じである。
- (8) 『看聞日記』永享三年二月二六日条。
- (9) 屏風装「源氏八景」の図版は「源氏物語図 細工貼交」として『統時代屏風聚花』(しこう社図書販売 一九九三年 第一一八図)に収録。作品解説は私が担当したが、主題を「源氏八景」とすべきであることが執筆当時はわからなかった。ここに解説の不足をお詫びし、訂正したい。
- (10) 宮川葉子「第五節『源氏八景』について——長野善光寺本を中心に」『源氏物語の文化史的研究』風間書房 一九九七年。
- (11) 画帖の形状は横長の折本で、縦三九、八センチ横三一センチ。表紙は桜紋様がちらされた錦が貼られ、中央に「源氏八景」と記された題箋を貼る。桐箱に納められているが、箱書きなどはない。
- (12) 宮川氏前掲書三三四～三四五頁。
- (13) 宮川氏前掲書三四一～三四三頁。
- (14) その上、「寄懸り」とみえるのは、積み重ねた冊子本のようなものである。つまり、「乙女初雁」の図様【図12】は、本文に夕霧が「そうし」に寄りかかるとあるのを、閉ざされた障子に寄りかかるとはなく、積み重ねた草紙に寄りかかると誤解している。
- (15) 宮川氏前掲書三五六頁。
- (16) 『石山寺と紫式部——源氏物語の世界』大本山石山寺刊 一九九〇年 図版番号六三。作品解説は片桐弥生氏による。
- (17) 日高氏前掲論文 三三～三四頁。

図1 伊達吉村「源氏八景御手かかみ」(仙台市博物館蔵)「明石晩鐘」

図2 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)付属縮図(冒頭部分)

図3 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「帚木夜雨」部分

図4 「帚木夜雨」部分 屏風

図5 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「須磨秋月」部分

図6 「須磨秋月」部分 屏風の金具

図7 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「明石晩鐘」

図8 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「松風帰帆」

図9 「松風帰帆」部分 画帖の隅金具

図10 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「朝顔暮雪」

図11 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「乙女初雁」

図12 「乙女初雁」部分 杉戸引手

图13 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「玉鬢晴嵐」

图14 作り物「源氏八景」(彦根城博物館蔵)「夕霧夕照」

図15 「光源氏 湖水五十四帖」(石山寺蔵)部分

---

## **Furyu Garden, Furyu Warigo and Furyu Furniture**

Izumi Mari

In this paper I introduce tsukuri-mono that deviate from the requirement of refined tsukuri-mono (furyu no tsukuri-mono) that requires them to be “tsukuri-mono used only on a particular occasion”.

The first example I present is that of refined tsukuri-mono erected outside that appear to have been used repeatedly. And next, as an example of objects that were admired and stored as souvenirs in a different form, I have discovered from the Kanmon Nikki (Kanmon Diary) that partitions were made onto which refined warigo were pasted.

Lastly, I turn to refined sets of furniture seen during the latter part of Edo Period following a Tale of Genji theme that were custom made as part of a fantasy. Strictly speaking, these are not refined tsukuri-mono. They are miniatures made from paper, wooden sheets, brocade, metal and the like that were pasted into albums. There were also fake sets of furniture, which are depicted item by item in picture scrolls. Possessing one of these albums or picture scrolls was probably like possessing a set of refined fake Tale of Genji furniture. Severed from a bond with a particular time and space, these items, whose original purpose was their insertion in these albums and their depiction in picture scrolls, should probably be regarded as somewhat akin to fossils of refined tsukuri-mono.